2025.01 ver.1.2

希少がんリーフレット

国立がん研究センター
希少がんセンター

悪性腹膜中皮腫

（あくせいふくまくちゅうひしゅ）

※内容を簡素に記載しております。詳しくは HP をご覧ください。

悪性腹膜中皮腫について

悪性腹膜中皮腫は、中皮細胞ががん（悪性腫瘍）になった病気です。中皮細胞は胸膜、心のう膜などと共に、腹膜を作っている細胞です。腹膜は、おなかの内側（腹腔）をおおっています。ただし、同じように腹膜から発生するがんである、腹膜がんとは別の疾患です。

症状について

悪性腹膜中皮腫は検診が確立していません。また、腹腔内の病気であるため、早期では症状が出ない、という特徴があります。進行すると腹水貯留による腹部膨満感（お腹が張った感じ）、腹痛、腰痛、食欲低下、排便の異常、腹部のしこりなどお腹の症状を感じます。

診断について

悪性腹膜中皮腫は、採血や画像検査では確定診断にならず、組織をとる（生検する）ことでの確定診断が必要となります。ただし、採血や画像検査は疾患を鑑別するためには重要な検査となります。特に、同じように腹膜病変を起こすことが多い、消化器がん（胃がん・大腸がんなど）や女性における腹膜がんを除外するために、内視鏡検査や婦人科の診察を行うことも重要です。

治療について

悪性腹膜中皮腫は根治が難しい疾患であり、手術や放射線などの治療の効果は限定的とされています。薬物療法として、化学療法（抗がん剤治療）が治療の主軸のひとつとなっており、ニボルマブ（オプジーボ）が保険適用になっています。悪性腹膜中皮腫に限った治療の研究は多くなく、人数の多い悪性胸膜中皮腫の研究結果に基づいて治療が行われることが多いです。

●悪性胸膜中皮腫についてはこちらをご覧ください。

https://www.ncc.go.jp/jp/rcc/about/mesothelioma/index.html

希少がんセンター

希少がんセンター Facebook

希少がんに関する動画一覧